

室も、母国語での創作が基本だった。日本語の創作が活発になったのは、七〇年代後半以降、日本への定住化が進んでからである。その間を埋めるかのように、すでに作家として名をなしていた人たちが、子ども向けの作品を発表した。『生きることの意味―ある少年のおいたち』（筑摩書房 74年）で、なぜ朝鮮人は貧乏なんだと問いかけた高史明（コサキヨシ）は戦時下の日本で生まれた。父や兄に守られた朝鮮人部落での暮らしから一步外へ出て、本来、子どもが守られねばならない学校へ通うことになって初めて生じた疑問。作品はそこから出発する。朝鮮人の貧しさは『にあんちゃん』でもわかるように日本人の比ではなかった。この作品は第15回日本児童文学者協会賞を受賞した。そして金達寿は『わたしの少年時代―差別の中に生きる』（ポプラ社 92年）で、一〇歳で母の待つ日本へやってきた後、納豆売りから屑拾いまで、実にさまざまな職業を経て作家になるまでを回想している。創作では金石範の『マンドギ物語』（筑摩書房 78年）がある。先に出版していた大人向けの小説『万徳幽霊奇譚』を書き改めたものだ。寺に捨てられ、うすのろと呼ばれたマンドギが、濟州島の虐殺事件に巻き込まれ死んでいくまでを描いている。一九四八年四月三日に実際におこった事件で、南の単独選挙に反対して立ち上がった島民を共産主義者だと決めつけ、虐殺したものだ。

韓丘庸の『ソウル春にさよならを』（講談社・朝鮮青年社

76年）も、一九六〇年四月一九日、李承晩政權打倒を叫んでたちあがった学生デモを軸にしている。韓丘庸は戦後一貫して在日の子どもの描き、同時に南北の作品の翻訳や紹介に力をつくしてきた。いうならば先駆的存在である。彼は『海辺の童話』（牧書店 73年）で、日本の小学校に民族名で通うスンヒと、通称名の金村英子を対比し、民族の誇りとは何かを描く一方で、日本人教師にも問題を提起した。『ゆずの花の祭壇』（素人社 89年）では、これもまた一九四五年八月二四日、帰国する朝鮮人労働者たちを乗せた浮島丸が京都府舞鶴港沖で原因不明の爆発を起こし、沈没した事件をモチーフにしている。この事件を扱った作品は他に金節子（キムチヨルヂヤ）の『チャンジャ』（サンブライト出版『心はじけて』86年に所収）郭充良（クワクチャリヤ）の絵本『赤いくつ』（子ども書房 92年）がある。異色のものとしては、朴ユミの『パパをかえして!』（風媒社 78年）があげられる。長崎の大村収容所に収監され韓国へ強制送還される日を待つ父との書簡集は、新聞にも大きく取り上げられ、全国に大村収容所の名を知らしめた。ところで在日作家たちの作品にたびたび登場する朝鮮学校は、日本全国に存在しながら、じつは今でも日本人にはあまりよく知られていない。元静美（ウチシメ）の『ウリハッキョのつむじ風』（はるぶ出版 85年）で、小学五年生の男の子ヨンスンを中心に朝鮮学校の二学期におこった日常を描いた。そこでくりひろげられる子どもたちの世界は、朝鮮学校が